花園のあゝ花

ル 3
698
4

帝國圖書館藏

諸國里人談巻之四

㊐ 水邊の部

○水の韓　陸奥
○塩井　出羽
○泡池　武蔵
○掘兼井　美濃
○念佛池　西国
○嶋掛　下野
○裏見瀧　摂津
○有馬毒水　摂津
○援池　遠江
○若狭井　奈良
○塩泉　下野
○油泉　美濃
○入掛井　摂津
○浮島　出羽
○津志滝　安芸
○鼓滝　摂津
○高野毒水　紀伊
○龍池　相模
○竜穴　信濃

但金湯巴形玉堂
馬場中屋甚左衛門

㊅ 生植の部

○曾根松　播磨
○十六桜　伊与
○唐椅松　近江
○枝分桃　安芸
○音葉楓　相模
○観音寺笹　三河
○臥竜梅　武蔵
○遊行柳　上野
○伐り桜　京
○大番焦　堺
○八幡木　摂
○小町芍薬　出羽
○大樹　筑紫 近江
○八橋杜若　三河
○不動桜　伊勢
○八重桜　大和
○銭掛松　伊勢
○益渋撞　甲斐
○印杉　大和
○大竹　駿河
○西行桜　山城
○一夜杉　出羽
○物見松　美濃
○宮城野萩　陸奥

㊆ 水邊の部

菊岡茶山翁著

○水雜

水は坎の象なり其文横に流るる時は則三なり縱に流るる時は則川なり其體は純陰其用は純陽上る時は雨露霜雪なり下る時は海河泉井なり流止寒温は氣の鍾不晴晦し其味鹹苦は味の入る所同じくして水は萬化の源なり土は万物の母なり飲は水に資食は土に資飲食は人の命脉なり　本艸

水は火より柔にして水の患は火より慘し火は避て水は避へからず火は撲滅し難し水は如何ともする事なし男女陰陽の氣性然なり○茶経云山水を上とし江水を次とし亞

井の水下ル下略○谷響集云汲て盆に又盆ホ[illegible]
添湯すれば溢れ汲水同如にして変なく[illegible]に復塩一升と
以一升の水に和すれば其水増さに

○若狭井

南都東大寺二月堂の若狭井は常に水なし毎年二月
朔日より十四日迄法會あり干時寺僧加持して井に[illegible]
[illegible]くして三遍唱れば則水涌出るしかれども[illegible]
牛王を押す恒例なり此日若狭国警の[illegible]の渕の
水涌し光あり明神より進ずるの[illegible]と云物の
渕は遠敷郡の山の禁にあるいの渕し
遠敷明神は祭神上の宮彦火火出見尊下宮豊玉姫なり

往昔国主[illegible]甚多の渕に鰒と荷[illegible]
その日二月堂の井に鰒[illegible]
二月堂八月素院[illegible]十一面観音長七寸の和佛し
鰒波の渕より出現[illegible]佛の像し牛王の符は弘法大師の作
井

○塩井

陸奥国會津若松より東沢への往路六十里越[illegible]
樹に大塩[illegible]あり[illegible]五里余ひ宗町の川[illegible]
湖の泉大小二ヶ所あり大木を刳て[illegible]桶のごとくして
その泉を[illegible]木等を[illegible]
[illegible]くし民屋七八十軒塩を焼て產とし[illegible]海
[illegible]四日路より近ごろ[illegible]唐雲南省四川省[illegible]塩

井水もそし○夏は湖を浴て乾を勢多より地のあたりまで
焼る塩のあたりまで又浴衣を拭ホしたりくと塩のあたりまで

○塩泉

下野國日光山の山七八里うすくよ栗山と云温泉あり此の山より
水の湧出り出て流れ水し焼出てその焼る合和ようつるまて
焼る日塩のあたりまで仏法大師の加持あり一所と云り此所に新の
山中にて流るゝ人四日は流れをとゝり茶敷の食しきあし
此温泉い法の時の病人を治す事神験なり

○油か池

越後國村上の近所の山中黒川村高田領より京十間余の池あり
水よりよ油流るゝ土人芦を束て水をかき搜して穂をとゞめて
油をとゝ取て大小の桶に入て日数を経て油澄て
其上に浮出る油を掬取て用ゆ○天智帝御宇に自越州獻可代油薪之水土
臭水油と云○天智帝御宇に自越州獻可代油薪之水土
とあるい則もし又薪より出る土あり方一尺ばかり平の尾行る
切日に流れ出て茅の如く或人越後にて此土を得て焼て出る
○又土中より掘出て茅い伊賀近江にあり石よりあり土
あり木の根ようのものて三尺ばかりあり掘出して数日新
水乳なくなる時焼し上ホの岩より出るを上ニと云

○油泉

奥州谷汲の開基豊忠上人延暦年中東剛の時その
地を平治ホよ一ツの巖を撃られて石中より油湧出て
其年数を経て日我此地に来て大悲の像を安置して

廣く利益せを孤くいひ油ますく出るものなりとぞ
おりとく則油涌いろ〻事泉のごとく数大よりあらひ
十一面観音を安せりもとより其長五尺の像にして後延喜の
帝その霊験をきこしめされ額を華厳寺と賜ふ今油涌く
微〻さなれとも霊験の著明なる也今ふかあり

○掘兼井

武蔵国入間郡掘金村ふるきひに浅間宮の樹ありこ
窪めり石垣あり奥の井の跡なり方六尺ばかりの石を畳〻て井
桁とし まい埋こそ皆ひとし倭よ碑あり古れこれいに越
乃とのあるものを建しとし 川越より二里未申の方
千戒

此凹形之地所謂掘兼井之蹟也愁久而
遂失其處因以石井欄置坳中削碑而建
里語掘而難得水故云兼通難未知只從俗耳
寶永戊子年三月朔

高五尺六寸

掘兼井と稱する所一所平地間掘兼井
是より五六町西に方二十間ばかり窪の如く窪みあるを其
井の跡なりと云又乙女新田或人曾掘けるあり其土地
高くして水なかりしとぞ里俗みんなるとぞ

遊しけるとし掘金の名のあれなれん始今井といふを葛の字城
書より出て本の利を失るなり○享保九辰の夏三縁山増上寺の
塔中清光院昆条院の退院むさしに傳経し掘る此井を
經るに奉行志まづくまつりわらく花翁あとく書しき男文蔵を
秋よりむまれて出まさるに養のくいいわれる所を求めて掘る此井
をこそとりてそれはあるまれは去り入して此所より來るも
ころ実跡の跡なりけれ井よりてまそとおりありむかし川越の城より
預金魚へ鯉を献も彼の其此井ふかく水をきりくれあなたのく
此井荒しぬれはよしれあとして川越より上てたまひをうし悟
きこともかくも縁をまもりその附近の其
武蔵府をはるかの井のみの鯉はられぞ此は少なくとも一ヶ年

と称してむすしくなりけりれ僧達遠孫事しく帰ひ彼へとらに
去傳特く随念佛しとげく僧の菴室とく是僧のそく我冬しく
所よ往あるとかる事をきりて今物徳あるしれいふ那人とらず
右精く取事く人すそあり代るしくかの其を称ける甚わらる哉
志りれ、かの奴か亡霊なりんと御府の後瀬巻白隠大僧正よおの
事を申せ則碑石を拾あひ弔ひありける昌泉院に石塔を
たてゝまた奴が墓とそ今あり去し申いその年より十七年に
あたる年忌の弔ひありけるとし

○入梅井

摂津国矢田郡丹生庄原野村栗花落左馬亭しその内に
井あり径り三尺深一尺ばかり出ある水常は水なし入梅よ

入て沙弥ぎつし入梅い立春の後九百三十五日にあるし仮拓撥花河あて開き雪花徐落本年梅黄の頃なれ入梅のなかなる日なり紅い真勝とも横佩右大臣の聟にく累代久しき豊成の娘白玉姫い中将姫の姉なり中夏のころ比地ゆるて蛍をまとい髪を飾る祠をてて辞才天を祭るし其後ようのて水海ゆ今に年集の復たをこ

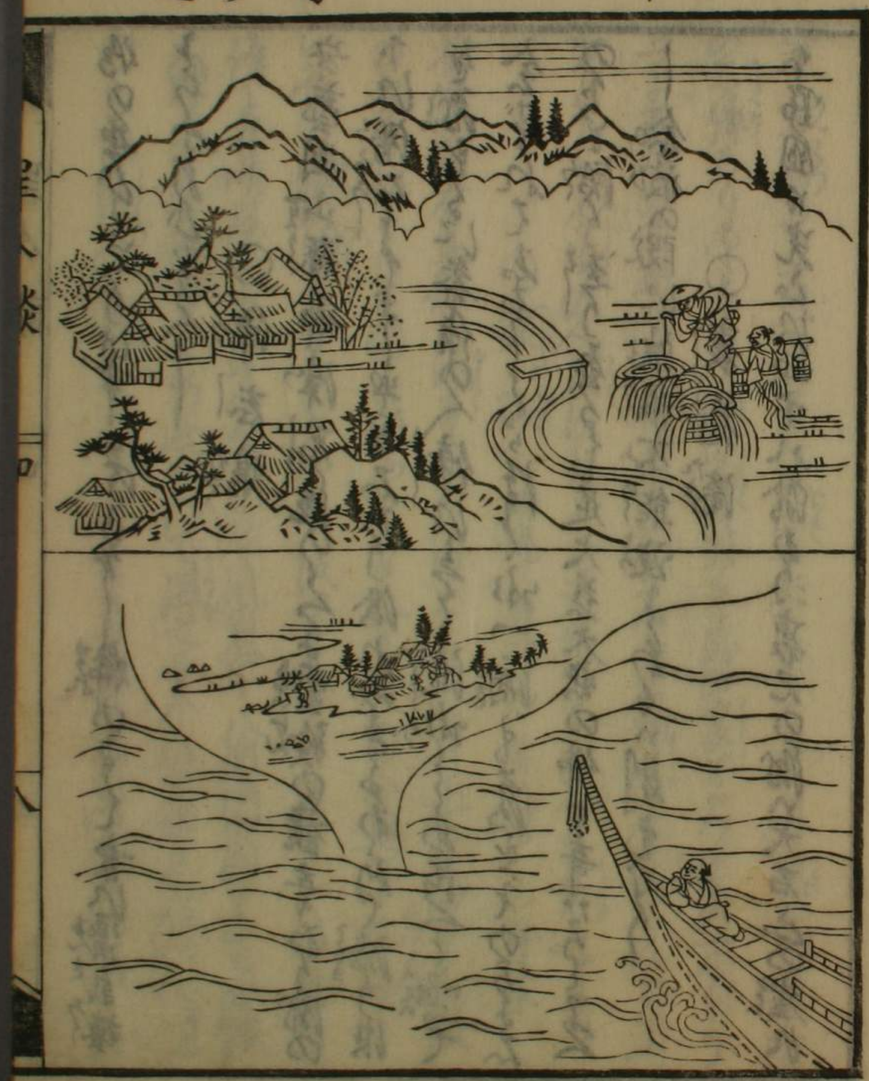
○念仏池

美濃国谷汲ゝ観下よりるに小き池あり波せる相を念仏相らよ池の中に石碑あり往人の立ちとまりて往生の人相のこれりて石碑よりひ去御まれて水面みのも

く沸くく水海ゆ池だちてゆるし立ちよ念仏まれて立ちよ池立責念仏を中に立ちし義ドさその池をのく立なりて去仏池ゝ立ちく

○浮鴨

出羽国最上郡羽黒の樹伐澤に天沼とあり中に大小六十三の浮島あり往二四尺より一丈三尺ゆ到るなのく風くのなりとも人とも有なし物ゆて大き風雨と雷別雨ゝ立ちの池の中に動ぐる山き相に殺ま生ゝ立ちし二十余の作く岸ゝ打ゝ寄り池ゝ副てゝ旨松柳桃梅桜山吹ゝ生ゝ立ち長年ゆて水海ゆ



りまわり時こて二十ばかりまろくなるし春夏花の咲
盛ふ咲はくしばつきの水に映ゝて仏異鄙カ[illegible]ん[illegible]の為し
汀あるは時光つゝ移い霞き動くと出く出ぐゝ為を押開て
出る事一切奇くし祈願の人かゝてその志所の為をきゝて
縁結を考へ吉山[illegible]白[illegible]

○鳥遊

西国の海上に廻船夜沖掛して沖中に碇を卸して
市ち隈[illegible]あんで百[illegible]辺まで一の為出来して掛本民家
立ぶ[illegible]人あ[illegible]て商人の為[illegible]と繁昌
と[illegible]るものゝ為に成ちゆる所や[illegible]とゝ[illegible]
[illegible]為に船く助くなる海所くし[illegible]

仏の恵ひとしなりけり　樹のうへ　乳樓

とうまひなる人〜

○津志瀧

安芸國山縣郡津志瀧の滝の下に滑石てきしやる石あり滝れおちてはるに奉侍の人傍にて滝水と嘲て

会ぶれて志ぶ〜くらはせ一瀧も高をそのうへ

のうを滑り走りまるし足大慈大悲の佛力奇なるとて

し念彼の段に波浪不能没とあるい則此なり

○裏見滝

下野國日光山に四十八瀧あり裏見の瀧い大石山の崖に

出て岩窟あり高一丈あまり深二丈七尺三筋川の媼とて老女

の石像あり水とより瀧の裏に出て瀧の裏をとる高二丈七尺

上より石像の不動明王あり石をとる者忽悩て敬せしとて

中ゆ〜不浄の人猶に近ぬ天狗のあれ命を失ふ云

○鼓瀧　蛛滝　有明桜　屏風岩　る塚流水

桜澤國有馬郡湯本の西八町ばかりにあり水の落る長

の数なほ仏ゆ〜しかるあれ八所心眼よ蛛滝く

いあり蛛の網のごとくなるに此瀧の

侍て有明桜とて名木あり○屏風岩十仞川西にあり法

大師ここの名を去り西瀧て瀧せ人入れ不可もし立ばあるの

○る塚清水と云水あり秀吉公有馬入湯の時茶の湯の水とし

○有馬毒水

湯本の町五町ばかりに池あり此の毒水師の卑怯姿ありて
虫どもを飲む即死する虫此水に離されて又死より多の地獄
虫の地獄と云を入て此谷を地獄谷といふべし

○高野毒水

紀州高野山上に玉川といふあり此水に毒あり傍に碑を立つ弘法大師の
まよひなりもの渡りしかんは旅人の方へ奥の玉川の水

○桜ヶ池

信濃阿闍梨皇円は法室上人の師なり比叡山におゐてその頃の
明匠一山の碩才なりしが皇圓日長寿は蛇身になりて吾此蛇をなりて
なりも弥勒の出世を待べし遠州桜ヶ池はその深さはかりなく
あまりて待んと此池の水を掬て其時池水へ入りて姿を
皇圓入寂と同時なりしと今に至て困窮の人は銭を池の辺に
入れざるもの無く此池は遠江国笠原庄桜村に男池女池とて
方五町ばかりの池二ツあり桜ヶ池と云池の社は牛頭天王なり
毎年八月彼岸の中日午の刻に半切桶に赤飯を盛て水練
の達者なる者これを押行池の真中まで至りて押はなし
其身は岸の方に游ぎ帰るべし于時池水渦巻てその飯器
水底に沈むべし此飯器はその数定りて発足に戻るべし三ツ七ツ或
五ツ等にて増減ありける

○龍池

摂州にて鳥窟のひとしの方に穴あり源なる虫へ升ツ

浪でんの中より入てその中の高しに水井天出現所と云り
○信濃の国に福ゝいあり此の所にて秋あり此の日数を
指へ出るに福と云又後より蛭ゝあり所出現所と云

○龍穴

信州安曇郡の中信濃と云国の宮の神の社下
に大きなる穴あり其深さ棹川の深さの如し大石の流れり
此川水流く此穴より入る未いづくとも知らず
里俗云西世浦郡のうちの内にその奥をたづねんと雄大
を以て水の渡らば此穴に入て元三所にて出るに行くに
大きなりよ深きこと限りなく来て精進潔しとして行くに
怖しかりしかれども敢るに入り水なくして高山

⑧ 生植部

○曽根松

播磨国印南郡曽根村にあり天満天神社の神木
なり菅公流罪の時此の所に寓し給ひ此の
小松を植給ひ弘正栄枯を松ひとし其枝葉
ひろがりて今枝葉才一の名木なり
高サ一丈三尺　周り一丈八尺　乾より巽へ指テ　七丈
横へ延り　十一丈　這枝角に枝ある其数百五十本

○不動桜

伊勢国白子の寺宗村徹音寺の堂の前より一本の桜あり四時
に花開り盛りの花のごとくよりて葉がくれよりの五七輪の

花厳寺の法花南寺いとなる安部まるこ称〻霊験世に有る
事なり法華経を誦し奉る安産なるべし
此寺新材一つい多る女五月帯を出さる事むべしよう今
まで かりし

○十六樫

伊予国和気山越村恩寺の林の中に一本あり
毎年正月十六日にて祭礼よんでしかるべむ〻南寺の
住僧来りて樫を伐て我る樫と家郷を定せ老衰に
及て病の身に成ぬ〻しかるに住僧人〻に命じて
しかるに正月十八日死ぬ

○八重樫

南都東風堂の前に八重ある八重ありて一條院
の御時上東門院御さとを樫庭に植し栽られしを
無福寺の別当に命じ切る剛命を惜しむ
所詮惜しむ〻樫へ我寺の霊木し何を他へ出さん
やく御願を問〻石の事をきく〻ん樫を切る者に祟
へ切ものの〻ものしに花を見るもの〻〻〻
素人と雖〻〻樫を切て我樫〻樫〻
且後世を願ふ者ありて他へ移植ん
予郡の在を樫を切て其花を
ちく〻しひ切て市野村を花墻庄と號〻ける

千歳をふるといへども平安なるよし栽をきけるとぞ

○唐崎松

近江国志賀郡唐崎の松は一茎一葉にして名高き名木也
世に知る所なり後水尾院の御宇に此木枯たるを再び植継
植し人の志かしこし此人其身を安じ我身の命をかぎりて此所に
志賀浦は三井寺より此木のあとし唐崎花園黒津右於

○笠掛松

勢州窪田と称ふの所を世国野にあり古人の此木を旅人笠を掛
人此所の木のもとに憩て此松の下は行程何りもあれども里人是
むかしより十月より正月まで七月より長野の松原とは其に竹にて一貫
文の銭をば此松の木にかけて太神宮を拝て里へ帰る

他の人彼蛇を見ずして蛇の蟠るなかへふみこみて其人死
故に此故に人々つゝしみて後此所をさけて通る事甚しく其口碑に云ひ
又参詣のものゝ此所を見れば速に通りて其の所を通りすぐといへど
あしくてなりてはわかりかゝりしと云り

○枝分桃

安房国新庄村と佐東村の界に大なる桃一樹あり
南は新庄村へ佐東村より此桃佐東の方になる枝の
桃は若く新庄の方へなしたる枝は甘美くして土人の云ひ
弘法大師此所にて桃を乞ひ給ふに此桃は甚苦しと人の
いふにより新庄にて乞給へば甘美なり
とそまいらせけるとして故に一木に甘苦の味ひありとぞ

○江戸櫻

甲斐國二の宮の社地に大木の櫻あり淡き皮のごとくにして仏法なりく多くくわしく伝ふと雖ども義を生ずること

○青葉楓

武蔵國金沢稱名寺の堂ひとしく一本の楓あり実事の楓

いとひとしく一とせの一ぬれんとすれども

ひ年よりこのかた紅葉せざること今に及ぶ八本の名樹あり

弥勒　西湖梅　黒梅　撫梅　文殊梅

蓍賢象梅　蛇泡柏

○印松

和列二輪に印松あり高麗相伝の薬園奈良の

異なる色て一ふしとなく後世まで伝ふ方もしら

ぬ一ふしなるてもあるよつて和い二輪のひとつを松とも月

ひ歌とも物ともし夫の神ものりとも石求めて三人同く

神ともする高社の名ともなり奈良の人多くこれを

いひ習ふしとなり又日本記四書記六の抜あり

○観音寺

三河國保飯郡小松原観音寺の本尊馬頭観音なり

汗基の音薩の形し毎年二月初午ひとしく参詣の人

混雑して潜くゆるし馬の姿の財沙彩を厩より呈一六の絵を

仰ぐ忽金ちり奇し又旬濃を洗ふ私ひ堂の前にある

呼吸とやすくもとと敬て取ちらひ私ひ

西行接　道きの柳

○大竹

駿河国府中の寺に天保年中の頃一夜の中庫より俄に大竹出たりしが夢とも一者とも知らず生ずるを遠隔なる数かし来りて見るに竹なりしが日を経て頭長一竹なりしが其間通り凡そ九三尺周りあり未曾有のものなりとて諸人天地を一年所番所天地の事なれば所ありしに任僧の云事程に所ありしに人々庫の中にて人々驚き怪物に擬人き九盆たること盆樽なとして数人飯炊きをなしく人の働き甚大き便に九寸ありしも

○臥龍梅

武蔵国葛飾郡亀戸村にある梅屋敷にあり
枝の横へ張りたるようにくねりの條の表地中に入て幹と枝とに成て
這うこと五寸十人余丈小家に成たる程の
巨木にて四方に蔓延大なる枝の所々時に成て破れ毎
年年毎の人数連俳諧あるく車馬に畳
敷

○八幡木

土佐国野根山御通の傍に稽の株あり住一丈五尺ある是八
幡宮の宮木利材の八幡の社に他の木を掘出し一樹を植
屋根板にて悪成就したるを八幡宮に奉
納連て往て方四五間ばかり今に在

○西行桜

山城国洛西嵯峨瑜伽寺の前に樹齢幾百年西行上人の
植置の桜一樹あり此桜大なる樹にて
西行桜と号す○寛清公一
日徒と成て国々を巡り東国に下り関東の
地にて和歌を詠じ東国の人民
家僕も発心して西住と号す遠国の
川の渡りに乗合の人々に死骨の
ありて流の所より便船の船頭の
夢に上人の船長大なる僧にて懺悔法師のいひまする
と西行の弟子にて血流そうあり懺悔の事

かくして取りて帰り西住が亡骸を見て愁歎しかなしく
及ひ此所西行か亡骸を埋め余都とハづるより番茶の出
とくなる事を知る何をか思ひけん此度より苦節の下
溜る出ハ終への世しれとそ西住を古所へ埋ミ其より独り棲み
いたく眠いハかつけられ思へともしや人の身の障り

○温竹擲

下野国芦野にあり奥州ノ界 柳のもとにて清潔の清水を
まつり傳へ往めり温泉大明神と称す
昔の人の流に浸す柳陰清くして五月の花
此柳よりの若竹しろきを西行柳といへるのけがれを
払ひ柳の精霊遊行上人ニ出会なりて云鉢の後より柳と云

○小町芍薬

出羽国雄勝郡湯沢より湯沢ハ秋田より今の
往還なし此宿の内小町村といふあり此所ハ出羽郡司良実の
館の跡なりし小町村ハ小野の小町の出生の所として今
小町の其れその流ていひつたへてさまざまの古き所あり
うつより此所ハ女子きりより出生して男子を生れ代々絶えぬ
とかくて芍薬の来今かかりし又田畑の畔に芍薬九
十九株あり小町の植ましたりといひつたへ代
あるけそ化なる出そそくれその中に植るし花の咲の
あらく流るる自ににも此れを折まそその色の愛にありて
大かた枝をすこしも折るとまつりしく其ごとく

秋云

九十九とらつすを中所のうれてゝい淀年の中ねこ永ゑひ
しうりの世にひひつくり又こゝにせに初〳〵せたるぬ
はくもうこの方ちこゝひ拾よい小所のうすの中にいつこゝ
伊世ゝこゝかりく所のうすあるにけ所の方茅元すゑ梅ま
けてゝるうすいい梅〳〵きうすしうの女ねの源によりて
九十九ゝぬのくうちうあるよゝ泥あるうゝ中ゝ

○一夜板

四条の紙屋川より童ゝかりく動よ板のゝくしゝあり二輪
四神の中一あるけ所の板一本淀りうちうくいひうゝ
元一万本ゝの格。擬切ちうくるふゝくけしてかのゝ平
なり〳〵ゝ中ゝ此の板〳〵

○代〻擬

京都東福寺の北殿司い名画ゝ右軍義持公名〳〵ゝ
時〳〵擬ゝ中ゝ一日北の志を謂〳〵ゝ筆ゝ所ゝ志別達せんゝ
北の日貶賢官爵ゝ
ゝ一紙一鉢部ゝ所ゝ是
ゝ中ゝ今一の彩ゝ近来東福寺ゝ所ゝ擬
ゝ中ゝ後世ゝ擬
ゝ中ゝ義持公ゝ
代〻ゝ今ゝ中ゝ

○大樹

是行天皇十八年ゝ流ゝの道の後の世ゝ行ゝ倒

もてる木あり長九百七十丈而其その樹を洛て往来人天を向て云是佛の木と一の老まありて曰はく樹へ攫し昔倒さんのまに旭の輝にあらんとへ則拝島を傾し各の如やに

あらんと阿蘇の山をかくしき 日本記

○又云背迫江四栗郡に大なる樹の木あり其圍立百

尋あり枝葉繁茂て甚多の乳朝よい其後にさしを多い

任勝国にまたまれて瀬賀郡甲賀三郡に蔭を蔽

月新あらんとす田畑の作物悉く百姓ともに歎てひ由

を奏ひたれて梯寺家移よ命しらんと拝代しむ 後紀

○物見松

夜陰ふ垂井と赤坂のるちを赤に然坂あるこの松

あり赤坂ふむ髪はけたのくよ帰りて往来の人をうひ

けをとへ是多坂へ越陰四国川と小田切のるに然坂村と

いのあり此の出生なりしを

○姉国寺藤秋

泉列堺妙国寺に番集の大樹あり高一丈三尺叢生

して十三本周り拾二丈比都なれ彩し奇の統

にあるをみあるを拾をなり拾をなりて何とをいけ

さりて田舎此れなりあるあるかけ

数本数枝を拾るひよりて

○八橋杜若

三河国碧海郡八橋山定専寺の杜若あり世よ有るなる年

值馬
合薬所
湯嶋包丁壬壹丁
中屋平左衛門

かり比せるの四節にして焼亀の蹴あておこし　水ゆく川の蛙に
ときかは緑をし姫は流の車にわらし花飛のわし

○真野萩

真野は文珠野の萩は本萩にて灌木のごとく露滋の所生
と云ふ花にして弓などにも作る木なり又東にある萩とは根に
ありて枝葉でその根にもえ出る草の事のあらいかと云なり
萩といふなれは萩の葉も葉の名をかえて花をさかせて
むかしみ仲とらふ人みちのくの縁なりゆゑに縁をもそく野をこ
け付るに萩をの萩を数拾十二合に合て登りけるまえに
本入の日二條大路にて人あふて車の通て手をとさらこと

里人談四之終